

気仙沼への

第9号
2012.3

東京都新宿区四谷4-13-1 山崎ビル2F E-mail: kesenumabureau@yahoo.co.jp

気仙沼の一日も早い復興を願って止まなかった 日出英輔氏を偲んで

畠山 朔男

昨年10月7日に気仙沼サポートビューローが一般社団法人として登録され、12月13日に設立社員総会が行われた。日出英輔さんが欠席の中、本法人の代表理事として全員一致で承認された。

日出英輔さんの訃報を受けたのは年も改まった1月16日（月）であった。訃報を聞いた私の気持ちはポッカリ大きな穴が空いたようで全てが虚しく感じられた。

日出さんから熱っぽく“気仙沼ビューロー”への思いを聴かされたのは平成20年10月頃気仙沼出身者の仲間で行われた懇親ゴルフ会の帰りのバスの中であった。その時が私にとり現在の気仙沼サポートビューローとの出会いの原点であった。郷里気仙沼を離れて50数年になり、ややもすると郷里の事を忘れがちになる気持ちと呼び戻してくれたのがあの時の日出さんの一声であった。“先輩、一緒に気仙沼の応援団の組織を創りませんか”と。

あれから3年間気仙沼大好き人間がメンバーとして集まり、毎月一回飯田橋の喫茶店の会議室に集合し、気仙沼に関する情報交換や気仙沼市への提言、ふるさと納税の啓蒙活動等につい

て、思い思いに意見をぶつけ合い、会議の後の飲み会でも引き続き大いに語り合い充実した日を送れて居た事をメンバーの一人として幸せに思っています。

この会の代表であった日出英輔さんは討議が道を逸れるといつも軌道修正してくれ、また対立意見が出ると上手く丸めて折衷案を示してくれるなど、流石にこの時は伊達に官僚生活40年も過ごしていないなあと感服した次第であった。

気仙沼ビューロー立ち上げ当時より日出さんは本会の永続性を考えて若い人達が運営して行く会にしなければならぬ、その為には本会をNPO法人とか一般社団法人等に組織化して行く必要性を盛んに説かれていた。

あの3・11以降はいち早く日出レポートとして政府が出した東日本大震災の復興計画案に対しては辛口の論評を寄せ、更には彼の持論を展開し定期的に気仙沼ビューローの仲間達に発信されていた事は日出さんの日頃より大所高所から物事を見る高い見識を垣間見る事が出来た様な気がします。

日出さんがあれ程急いだ一般社団法人化も実

現しました。また小山利英子さん武山健自さんの二人が理事に選任され日出さんが望まれた若返り化も実現しました。

残る課題は活動内容を如何に充実したものに
して行くかです。肩肘張らず出来ることを着実に
実行してゆく気仙沼サポートビューローでありた

いと強く願って居ります。

気仙沼復興の道のりは遠く険しいと思えます
が道半ばで亡くなった日出さんの意志を受け継
ぎ郷里気仙沼と在京気仙沼人との架け橋になれ
るように会員が一致協力して活動して行きましょ
う。

気仙沼の団塊の世代の皆さん、 復興のためにもう一度力を！

大森 郁夫

東日本大震災が起きてから1年が経とうとして
います。昨年3月11日午後2時46分からの様相は鮮明に脳裏に焼き付いており生涯忘
れることはありません。震災から立ち上がり未
来の気仙沼のありたい姿を目指して、気仙沼の
復興に全力投球している故郷の仲間への思いが
募るなかで、多くの支援ができないでいること
がいつも心から離れません。

復興の道標が多くの市民が参画して策定され、
昨年10月に“海と生きる”を副題として『気
仙沼市震災復興計画』が公表されました。「基
本理念」、「復興の目標」、「重点事業」から構成
され、計画の着実な実現のためのマネジメント・
サイクルを回すことも唱ったものであり、気仙沼
の復興への確信と将来への希望を共有すること
ができるものです。また、気仙沼の皆さんや関
係者が心の拠りどころとして共有できる活動の
指針ともなっており、過去に類を見ない計画で
す。復興計画の最重点計画は、喫緊課題では「産
業再生と雇用創出」であり、将来を見据えての
重点課題では「自然環境の復元・保全と環境未
来都市の実現」であると思えます。

これらの施策・計画は、ややもすれば部分最
適や現状の改善を中心に検討されがちですが、
関係者の熱意と衆知を集めての全体最適、将来

最適をも考慮した素晴らしい計画ができたこと、
故郷を離れている私も安堵を感じ、明るい故郷
の将来を感じるところです。短期間にこれだけの
内容を抜け落ちなく検討した『気仙沼市震災復
興計画』の策定に携わった方々、また周りから
意見を述べられた皆さんのご努力・熱意に対し
敬意を表します。これだけのことを考察できる
人材もおられますことも誇りです。

このような復興計画を創り、現実の困難を乗
り越え、将来を見据えて着実な歩を進めておら
れることをさまざまなメディアを通じて知るにつ
れ、かえって私たちの方が明日への元気と勇気
をいただいているような気がしてなりません。気
仙沼を心の故郷とする私たちは、これまで年齢
とともに故郷との距離が遠くなり、関係が稀薄に
なりがちでした。皆さんの活動を知るにつれ“気
仙沼復興支援への思い”が強くなり、故郷との
距離を縮めることさえできています。

昨年10月の「気仙沼を元気にする会」で
は、300名を超える気仙沼出身者、関係者が
集まり、復興への支援を互いに誓いました。また、
復興の状況を共有することにより気仙沼との心
の距離を近いものにできました。今後も、さま
ざまな活動を通じて故郷復興を願いつつ、それ
ぞれが、其々のおかれた立場と気持ちで、『気仙

沼市震災復興計画』の実現の活動を支え続けたいと思っています。少しの力を集めつつ、“故郷復興の思いの輪”を広げる活動を継続することにより大きな支援の力としたいと考えています。

「気仙沼サポートビューロー」を立ち上げ、私たちの活動を導いてくれた気仙沼中学同期生の日出英輔君を偲んで

震おち 故郷思い 黄泉の道

(平成 24 年 1 月 20 日通夜にて)

「気仙沼を元気にする会」に出席して

横田 悦子 (旧姓川村)

津波が車や家を、船をも曳いてゆく。

その中の人間も吸われる様で、大自然の成り行きに従う外なかった事を知った三月十一日である。

穿った見方をすれば、人間の力を過信し、大自然の脅威を忘却したらどうなるのか想定しなかった大震災。大津波そして火災。郷里、気仙沼その渦中であつた。テレビを見ていた私の目も次第に潤んで来た。

人間の行いは結集し、一丸となれば勝つ事体を常々見聞して来たが、大自然の猛威には人間の営みは小さな事を知る。親戚は、友人、学友はと心配し連絡取り合った頃から早半年経た十月二十二日、東京で「元気にする会」が催された。場所は目黒区。

そこは「目黒のサンマ」が縁で郷里と姉妹都市である事をはじめ知った。その場にご臨席の市長様、議長様へこの被災で体験し、私の考えたお願い文を手渡す事が出来た。「〇〇ちゃんの従姉妹さん、似ていますネ。今どうしているの？」等、お二方が初対面の私に親しい問をしてくれた。これが地方行政の良さなのだ。木目細やかな対応が伝わり、私が提案した公文に対する真摯さを直感した。「この依頼文は、没になるまい。帰ったら担当にまわり、協議対象になるだろう」と。

何せ被災地だからこど、体験し、私の知った「身

元保証人」という数ヶ月の実践。避難所退出後又も入居すべき施設へその場での直筆署名捺印が求められてゆく。遠方ながら、接点ある私が生存中は良い。

しかし、万一の時はどうなるのだろう。と考えると該当者個人のみならず、大義ある制度化や立法化を勘案しなければと思えた。少子化、高齢化が進行中の現在より広域的に展望を拓くべきと痛感し、周辺を調査した。

唱える「日常生活自立支援事業の充実又は天涯孤独高齢者、施設入居等の簡素化などについての依頼」はすでに東京、横浜等では施行されているが、地域では勘案事項でない事が把握出来た。この被災地からこそ声を挙げ福祉事業を制度化してほしく、私はお願い文を受理して頂いたのだ。それには、市議会に上提し、議決を得、それから条例化等が見えて来る。事によっては上部省庁扱いになる事も考えられる。時間はかかるが「被災地からこの声を」と天涯孤独者の生活環境に憂い少ない日を迎えるべき日が、いつか来る事を願う。微力ながら「何かしなければ」との気持ちは、あの日以来変わらぬ私なのである。

砕^{くだ}け^た散^ちる
は^はげ^しり^アス^の
不^し知^らぬ^いが^た
火^か型^が
の^の
雷^{らい}
五^ご
郎^{ろう}
立^た
つ

復興への確実な一步に希望をこめて

上坂 良子

あの日から1年余が過ぎ、花、緑、爽やかな風の季節が再び巡ってきました。仮設住宅の人びとを思うと、季節よ、早く暖かくなりますように、心身共に温もりのある安寧の日々が来ますようにと、祈らずにはいませんでした。その後の気仙沼の情報は、全国版で天気予報の表示、ドキュメンタリーやニュース、また、電話訪問での会話などから悲喜交々の日々の出来事が伝わってきていました。

関東では、ふるさとを少しでも支援しよう…と、若手を中心に同郷の老若男女の結束した活動が始まっていました。個人的な微々たる支援活動も限界があり、私も遅ればせ集会や勉強会に参加させていただいています。国の支援策の政治的決断が遅いこと、その復興支援のしくみや助成のあり方などに人びとの批判が集中していますが、気仙沼では独自の復興構想が関東在住支援者らも参画した中で具体化していました。この集会では、ふるさと復興の「海と生きる今と未来」の情報共有が話題の中心でした。それにしても、次世代を担う頼もしい若者たちの活躍に光明を見る思いでした。

思い返せば、あの日私は関東域のある場所で「病院機能評価」という訪問審査の最中でした。突然の異様な振動にもめげず、医療機関の職員さんたちは速やかに災害対応シフトに早変わりしていました。余震が続く中で医療の後方救援

体制の広域情報交換が始まり、その場は機能評価どころでない空気に一変しました。当該医療施設は、特殊な傷病領域の治療施設を有するため患者受け入れ要請があり、緊迫した雰囲気でした。私たちは一端ホテルに戻りましたが、やっと戻ったホテルロビーは多数の帰宅困難者を受け入れており、毛布やシーツ、飲料水やオムスビなどがホテルから提供されていました。EV停止のため移動できず、レストランの一角で評価会議を開くことにしたその時です。TVの震災ニュースが流れ、気仙沼等の想像を絶する惨状を知り愕然としました。身内や親類縁者、友人たちの安否確認をしたい気持ちを抑え、祈るような思いで、まずは職務を終えることに集中しました。

被災地みなさま方の気持ちを思い、また、立場が入れ替わった場合を考えるなど、日本中の人びとが自らの生き方の姿勢や価値観についてこれほど自問したことがあったのでしょうか。また、覚悟をもって立ち上がろうとしているふるさとから、逆にどれだけ活力や勇気をいただいたことでしょうか。昨今、想定外とならないように教訓を含めて近未来に確実とされる地震域や津波襲来予測が報道されていますが、助け合いながらも気を引き締め、確実な一步前進を共有したいと思う今です。

(私は終戦直前に疎開、小・中学校を両親の故郷気仙沼で過ごしました。) 神奈川県在住

ピンチがチャンス！！がんばっぞ気仙沼 気高出前教室に参加して

小野寺 孝成

進路指導の一環で、関東同窓会に気高の2年生対象に、現在の仕事と自分の高校時代について、語ってもらいたいとの話がありました。

今までにない話であります、意図するものを直感し、「自分がやらなければ」という思いが募りました。

行く前には、逸る思いがありつつも何を話そうかなかなかまとまりません。

当日、控室に卒業生講師9名と校長、教頭を始めとする先生方と顔合わせし、自己紹介しましたが、なるほどと思わせるような講師陣で、しかも自分よりほとんどがずっと若い後輩ばかりでした。それでも皆生徒の前で話をするとなると何か戸惑いを隠せない様子でした。

時間が来て約30人の各クラスに分かれて、担当の先生に誘導され教室に入ると、一瞬のざわめきの後、整然とした感じで前列に女子で2・3列に男子といった並びかたで受け入れ態勢万全といった様子です。

自分は、現在行政書士の仕事をしていますが、長年塾講師をしていたこともあり、こども達に話をするには慣れてるつもりでした。ところが、今回の大津波の後でなると話は別でした。

あまりにも、激励的に話をするには自らも被災者であり痛々しく、それでも少しでも力になればといういささかの思いがありました。

そして、結局、自分の高校時代のありのままの姿と、その後の思いと現在について語る中で何かを感じ取ってくればいいと語り始めました。

- ・気仙沼高校に入ることが夢であったこと
- ・そして、一人でも多くの友達を作り、できれ

ば学年全員と話をすること

- ・甲子園に行きたかったけれど、軟式野球部に入り、1年で退部したこと
- ・2年生で演劇部に入り、木下順二の「三年寝太郎」に出演したこと
- ・NHKの『のど自慢』の予選に出て、鐘三つだったこと
- ・英語は、好きで2年生の時は、毎時間質問したこと
- ・1年から3年の最後の授業まで休まなかったこと

などなど取りとめないことをしゃべりました。

こんな話の中で、どうしようもない問題が起きたときに自分の頭で工夫を凝らし向き合うということを理解してもらえたらと思いましたが、どんなことがあっても高校2年生でしかできないものに思いっきり取り組んで欲しい気持ちが勝っていました。何事も問題は遭遇するものでマニュアル道理のものはないので、知識と経験と自分を信じて判断していかなければなりません。

話でも書くにしても一言で済みますが、そんな力をどうやってつけるかそれが問題です。

今は、健康で強いからだを作り、一冊でも多くの本を読み、そして周りのひとの話に耳を傾ける意味を強調しました。

小説など色々の本を読むことにより、自分と同じ価値観に勇気づけられ、また違った見方により、外から自分を見つめられるようになり、頼れるもう一人の自分に気づくことができるからです。

ひとに寄り添うには、それなりに自分に向き

合う勇気が必要で、そのためには学びが大切であると思います。

どんな状況でも、夢を持ち、勇気を持って前へ進んで行ってほしい。

そのためには、思いも大事だが、それに向けて自分が何をし、して来たかをとらえなければなりません。そういうことをできれば手で書くことによりコツコツと努力を積み重ねることにより夢に近付けるものだと思います。

行政書士の仕事は、憲法、民法を中心とした法律体系を理解することももちろん重要ですが、人とか企業の気持ちとか実際に把握した上で、問題点を見出し解決していく必要があります。

休憩時間のあと、質問を受けることになりました。けれど、自分からというのは少なくこちらから当てていくことになりました。

- ・コミュニケーションの能力をつけるにはどうしたいですか。
- ・震災前と後で、意識がどう変わりましたか。
- ・行政書士になるには、どんな勉強すればいいですか。
- ・どんな業務にやりがいを感じますか。
- ・英語は、どうすればいい点が取れますか。
- ・集中力をつけるには？

など様々な質問がきましたが、残念ながら全員の声を聞くには至りませんでした。

全体として、メモを取りながら聞いてくれる生徒がいることに驚きを感じました。また、鋭い質問もあり、単なる出前授業ではなく、自分自らも考えさせられる良い機会だったと思います。今、振り返ると後輩がくれたプレゼント授業のような気さえします。

終了後の反省会では、それぞれのアプローチで生徒の心をゲットしようとしていたことなどを知ることができ、ほほえましくかつ愉快でもありました。

夜の反省会でもずっと後輩の方々とコミュニケーションができて、気仙沼のくじけない明るくたくましい感性に触れることにより、自分はまだまだと思い知らされました。

今までにない企画で、震災が創出したわけでもないけれど、卒業生という民間の人的資源ということで、気高を始めできれば他でも、という強い思いを抱き東京に戻りました。

今回の企画を立てていただいた気仙沼高校生徒指導部の齋藤道有さんに感謝です。

これからも皆で頑張っていきましょう。

みんな『どごにいつでも気持ちは気仙沼』です。ピンチがチャンス、負けでらんねえぞ。勝負はこれからです。

『がんばっぞ、気仙沼』

震災とネット活用について

小山 利英子

あの大震災から1年が経ちます。皆様には大変な日々を過ごしていらっしゃるかと存じます。あの時、被災地出身者がどのようにして家族の安否を知り、被害の大きさを知っていったのか、今日はIT活用といった面からお伝えします。

■ツイッターとUSTREAM (ユーストリーム)

あの日、東京も大変な揺れを感じました。私の会社の小さなビルもエレベーターが止まり右往左往しました。道路には大勢の人があふれ混雑しています。普段利用したことのない非常階段は、1階出口の鍵が地震で壊れるアクシデントがあ

り、小さな混乱も生じました。高層ビルや高層マンションでは、安全のために長時間に渡ってエレベーターが利用出来なかったと聞いています。

その直後に、三陸に大津波警報が発令されたことをラジオで知りました。会社にはテレビがないのでラジオがたよりです。そしてツイッターで情報を探しました。すると、NHKの番組が一般視聴者によって USTREAM（以下 UST）で配信している、つまりインターネットを介して、パソコンで NHK 番組を見ることが出来るという話が広まっています。このことは本来は違法行為です。

UST 放送をしている一般視聴者の方はネットを通じて NHK に違法行為を謝るとともに、しかしながら、これは必要なんです。続けさせてくださいと懇願。それを見ている多くの視聴者も続けることをお願いしました。NHK は中止を言い渡すのではなく、むしろ RT（リツイート）といって、情報を拡散してくれました。これは NHK 担当者の方の英断だったと思います。さらに翌日からは NHK が UST を利用した配信を始めました。大震災時の特例です。民放も UST 配信を始めました。おかげでテレビを持っていない人やオフィスからもテレビを視聴出来ました。それは海外からも視聴出来ることを意味します。

幸いなことに 16 時頃、気仙沼の弟から「無事」とメールが届きました。東京では電車が止まり、多くの帰宅困難者が途方に暮れています。私はやっとの思いで歩いて帰宅すると、今度は「気仙沼の大火災」がテレビに大きく報じられました。

まるで気仙沼じゅうが火事で燃えているかのような映像に背筋が寒くなりました。弟からのメールには「まわりは火の海」と書いてあります。弟は南気仙沼駅近くのビルに逃げ込み、津波からは免れたものの、ビルのまわりは火災です。

そして、ある時間を境に気仙沼からの連絡が全く取れなくなりました。3.11 の 22 時頃だっ

たと思います。気仙沼に向けてツイッターで呼びかけても返事はありません。悪い胸騒ぎがします。気仙沼はいったいどうなってしまったのだろう。

夜が空けて 12 日。テレビではヘリコプターから中継をしています。その様子に愕然としました。「気仙沼上空です」と言われても、あまりの変貌にどこが映っているのかわからない。テレビを見ながらツイッターで「あれはどこでしょうか?」と、まだ会ったことのない気仙沼出身者とネット上の文字で会話をしました。

テレビの画面には助かった方の顔が映し出され、それを食い入るように見ます。テレビはお名前や住所などの個人情報を出さない方針があるようです。しかし、私たちが、「もっと情報を出してください」とツイッターで呼びかけ、テレビ局に直接連絡し、徐々に、インタビューの際にお名前を呼んでもらったり、表示してもらうようになりました。

誰かが「〇〇さんがテレビに映ってます」とツイートすると「それはおらいのオバちゃんだ」というコメントも入ってくるようになりました。避難している方のお名前を見つけては、それを必死で入力してブログに載せました。

一度は安否が確認出来た私の家族は、火災の後にはわからなくなりました。気仙沼では携帯の電波が繋がらない。停電のために携帯に充電出来ないなどの状況だったため、現地の様子を知るすべがありません。不安な気持ちを押しさえながら、ひたすらに情報収集をしていました。

■ Google Person Finder

その頃に活用したのが Google が提供したサービスです。このサービスが立ち上がったのは大震災からわずか 1 時間 46 分後のことでした。土台となる部分は以前から開発しており、海外では活用されていたものを日本向けにアレンジをしてオープンされました。それでも「急ぎ」優先だったので、最初は「姓名」が逆ということ

もありましたが、あっという間に修正され、さらには「特徴」を記載出来る欄も追加されるなど、次第に使い勝手が向上しました。

■ mixi

mixi に気仙沼情報コミュが立ち上がりました。気仙沼出身の若い方が作ってくださり、そのうちに情報が増えてきたので、町ごとにくま分けてくれました。私も知りうる情報を書いたし情報も頂きました。リアルタイム情報はツイッターで探し、少しまとまった情報は mixi を使うというような使い方を分けてです。

私の友人・知人にはインターネットをそれほど活用していない方が大勢います。そういう方から電話で問合せが入り、私はちょっとした情報基地局として、代わりに安否を確認していました。それは必ずしも良い情報だけではなく、悲しいご連絡をしなければならぬ事もたびたびありました。

■ Amazon (AWS)

Amazon は、サーバ分野で大活躍しました。こういった際に一時的に混み合うサイトがありません。日本赤十字やボランティア団体といったページはアクセスが集中してサーバがダウンしてしまいます。そこで Amazon は、自社の技術力で、無償でサーバを貸し出したのです。期間限定の災害対策。しかしながらサーバを提供しても、使いこなせなくては何にもなりません。そこで、AWS のユーザーグループ「JAWS」の方々が無償のボランティアで「落ちないサーバの構築」を夜通し対応していたのです。

■ Yahoo!

Yahoo! は、日本人のポータルサイト利用でダントツの人気サイトです。最初に開いたページにわかりやすく震災情報を表示するというのは、なかなか難しいものです。Yahoo! では、東

電から電力情報を PDF でもらっていたようですが、PDF をダウンロードさせるよりもわかりやすい情報を作って展開していました。それはその後、東京の駅などに表示され、電力の状況をわかりやすく伝えていました。

■ 支援物資のサイト

地震直後はガソリン不足の問題で支援物資を届けることさえ出来なかったのですが、徐々に解消されていくとともに、被災地に支援物資を提供するためのサイトがいくつも立ち上がりました。「欲しい」と書くと、あっという間にたくさんの物が届く、届きすぎるなどから、様々な工夫がなされていきました。マッチングです。いまも Amazon には「欲しいものリスト」があります。

これらの IT 系の下支えの現場担当は若いエンジニアです。日本の若いエンジニアは素晴らしいものを持っていると感じた次第です。

■ 携帯電話

家族の無事を知ったのは 13 日の午後のことでした。その日、気仙沼に au の災害時アンテナが出来ました。au を利用する気仙沼の従姉妹を通じて家族の無事を知ることが出来ました。

私の記録によると、docomo が使えたのが 16 日夜、Softbank は 30 日。

気仙沼の親戚の安否がわかり始めたのは 17 日以降、docomo が通じるようになってからでした。

こういった災害時の通信インフラは、企業まかせではなく国としてサポートして欲しいと思いますが、当時、福島原発問題があり、政府もそしてマスコミもそちらに話題の中心が移って行きました。

携帯電話を持たないご年配の方の安否確認が取れなくて苦労しました。2 週間もわからなかったという方はたくさんいらっしゃいます。ガソリ

ンがなくて帰ることも出来ないもどかしさ。憔悴しきって、それでも普通に仕事をしなければならぬ辛い時期を過ごした被災地出身者が大勢いました。もちろん、それは被災者の皆様の苦勞とは比較にならぬものではあります。そんな時の支えの一つがネットでの情報収集でした。

■現在

気仙沼の情報を得るために利用しているのはFacebook、ツイッターそして気仙沼から届く三陸新報です。たまたま三陸新報の年間購読契約をしていたおかげで、震災後の気仙沼に関する情報を得ることが出来ます。

ここまでネットの恩恵を書いてきましたが、ネット情報は必ずしも正しいわけではないということをお伝えします。現実社会と同じで中には騙す人もいます。そんなネットと上手く付き合うためには、ネットに詳しい人と知り合ってお

くというのも一つの方法です。車に例えてみます。車はとても便利だけれど、一つ間違えると大変な事故につながることもある。それでも車のない社会には戻れないと思います。ネットも良い点を見だし、また危険な部分も承知しながら使うことが重要です。

今回の大震災で情報インフラのもろさも実感しました。被災地ではネットどころではなかったと思います。今なお避難生活が続く皆様にとって、良い面もあるが難しい面もあるネットをどのように活用したら良いのか、震災にも活用出来るものになる得るのか。

東京ではネットを介して知り合った気仙沼にゆかりのある方々が集まる機会が増えました。きっかけはネットでも実際に会うことで様々なことが加速します。このパワー、エネルギーを復興の力に変えて、ともに歩いて行きたいと思っております。

ご冥福を祈ります

武山 健自

ご指導いただいた日出先生がお亡くなりになりました。まだまだこれから、と思っていた矢先の訃報、先生もさぞ無念であったろうと心中を察するに余りありません。

昨年9月、先生の事務所へ行った時のことです。20代の出身者で開いた気仙沼でのイベントを、地元の皆さんが支えてくださったことを話しました。先生は「気仙沼も変わったなあ!」とうっすら涙を浮かべ、メガネをずらしていました。その涙の理由が、故郷をおもう後輩が広がっていることなのか、若手を受け入れる気仙沼の心意気に感銘したのか、今となっては推し量ることしかできません。先生の思いを斟酌すれば、

そのどちらもだったのかもしれませんが。

先生はご経験をひけらかすことなく、私たち後輩たちに接してくれました。親子以上の年齢差があるにもかかわらず、私たちの話をじっくり聞き、適切にアドバイスしてくださいました。実直で、曲がったことを許さない、どんなことでも変わらぬ軸足。先生と酒を酌み交わしたことが私の大切な財産で、後輩達にもぜひ接してほしいので残念でなりません。

微力ではありますが、日出先生の想いを引き継いでいきたいと思っております。

ご冥福を心からお祈り申し上げます。